琉球新報1986年6月30日

よみがえれ地方語

沖縄の実用地方語の活字表記 ③

◎10◎

船津 好明

さて、こうして新しい沖縄文字が加わることとなると、これに合わせて他の色々な表記上の約束を設けなければならない。基本的なところを二、三挙げてみると、まず、長母音を持つ語の表わし方だが、一つの単語内において同じ母音が二個続くときは「ー」によって表わすのが適切であると考える。

たとえば、沖縄語辞典における coodee は「ちょーでー」(兄弟)と表わすのが適切で、「ちょうでぃ」、「ちょおでえ」などと表わさない方がよいと思う。もっとも、沖縄の地方語の中には、母音の長短が重要な意味をもつものがあるので、その旨を特に表わしたいなら、この例は「ちょおでえ」と書く方が音韻に一層忠実になるが、文章にしたときの読み易さを考慮すればやはり「ちょーでー」の方がよいと思われ、従って、伸ばしの「ー」は一つの文字のような役割を持っているわけで、軽視して書き落したりしないように注意する必要がある。しかし、一つの単語内において同じ母音が三個以上続くときは「ー」で表わすのは二個目の母音までとし、三個目はその母音の文字で表わすのが適切であると考える。

つぎに、漢字の取り入れ方である。漢字は国語の場合と同様適宜用いることが望ましいと考えるが、地方語の表記法が必ずしも徹底していない段階においては、漢字は控え目に用いるのが無難と思われる。そしてその傍らに、地方語による仮名を振ることが大切であると思う。これは表記と読みの統一性を保持するための初期的努力である。かつて国語にも漢字に振り仮名をつけるのが一般的であった時代があったが、国民の国語力の向上と共に振り仮名をなくしていったという経緯を範にいただくものである。

振り仮名について最も注意すべきは、寄せ字の大きさである。たとえば「今日」に「ちゅー」と振り仮名をつけるべきところ、振り仮名の活字が元々小さいために、「ちゆー」と同じ大きさで振ってしまったとすれば、これを cuu と読ませるのは無理である。なぜなら振り仮名は読みを知らない者のためにあるのであり、「ちゆー」と書いて cuu と読めるぐらいなら、振り仮名は元から要らないからである。

振り仮名は活字が小さいために校正の厄介者であるが、前記のように校正においてはゲラの上の形影のすべてに等しく眼を光らせなければならない。筆者がこの点にこれほど字数を費すのは、これまで校正者のほとんどが振り仮名に対してあき言目(本土も同じ)であったように見受けられるからである。活字がないというのは理由にならない。なお、沖縄文字を用いると、前記のような心配は非常に少なくなる。

漢字を用いることとなると、振り仮名や送り仮名などのつけ方についても約束がいる。概ね国語式でよいと思われるが、沖縄の地方語は格や後続語によって語尾が変化するなどの特徴があるから、この特徴が生かせるような工夫をしなければならない。たとえば、「犬」単独一字に沖縄語辞典に即して仮名を振るとすれば「いん」となるが共通語の「犬も」に対しては「いぬ」と振り、「犬ん」と書き、共通語の「犬は」に対しては「いの」と振り、「犬ー」と書くことになる。

沖縄の地方語による活字表記の本来を考えると、当然のことながら、国語の介添えのない、独立した文章でなければならない。国語の介添えは入門書の類にとどめるべきである。

地方語文はそれ自身で書き方、読み方が統一されなければ、発展性のある活字文化を形成することはできない。次に、沖縄文字を用いた独立した地方語文の例を掲げる。

(沖縄語研究家)